

東西文明の比較 (5)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

前月号(213号)では、私たち日本人のルーツが二つあったことを記しました。その一方はシベリア・バイカル湖を經由して北海道・東北へ、もう一方は黄河・長江流域から九州・関西地方へ流入したことです。南北に細長い列島に北と南から人々が入ってきたこととなります。このことには興味があります。南北に細長い国々、たとえばイタリアやベトナム・韓国などでも南と北では種族が異なっていることです。それぞれの国は、統一までに数々の争いを経ています。しかし日本列島に来た南北の異なる種族は争いごとの形跡がありません。そのことは、日本列島が自然の豊かな恵みに覆

われており、「狩猟・採集・漁労」の生活が1万年以上続いたという世界に自慢できる「縄文文化」の賜物といえるのではないのでしょうか。近年、「縄文文化」が静かなブームになっているようですが、私も「縄文文化」が大好きです。そこで縄文について私観を述べてみたいと思います。

最古の縄文土器

青森県の浜町大平山元遺跡から出土した縄文土器を最古とする説があります。約1万6千500年からそれ以前の縄文草創期(1万6千～1万年前)のもので、現在、世界最古の土器とされています。

縄文人たちは二つの道具を持っていました。第一の道具としては、「狩猟・漁労・採集」で食材獲得のための道具類と食料を調理・加工するための石皿とか磨石、土器類、そしてこれら道具類を作るための道具です。そして第二の道具類として、土偶、石棒、石剣、石冠、御物石器など祈り・呪術などの道具類、いわば“心の道具”です。これらの道具、特に土偶は7～8千年前の縄文早期中ごろ関東に出現し、東海から近畿へも伝えられました。4～5千年前、縄文前期末から中期初頭にかけて、新潟から東北北部、宮城県でも多数の土偶が作られました。

その後、弥生文化の誕生によって、この第二の道具“心の道具”は消し去られました。弥生時代は効率を重んじる農耕主体の文化を推し進めたからです。

縄文人の食生活

多くの縄文人は東日本の落葉広葉樹林帯に集落を営んでいました。大部分は海岸の近くでした。福井県若狭町鳥浜貝塚の遺物を手がかりに縄文人の食料を推測した研究によると植物の全熱量の43%をクルミ・クリ・ドングリ・ヒシなどの堅果類から得ていました。

感心するのは、縄文人の食生活が季節の変化に対応していたことです。春はゼンマイ・ワラビ・コゴミ・セリ・フキノトウ・ノビルなどの草類、スガイ・アサリ・イワシ・フグ・スズキなどの魚介類、トリ・シカ・イノシシなどの動物類です。夏は保存食。秋はキノコ・トチ・クルミ・クリ・ヤマノイモ・ヤマユリなど。魚はアイナメ・メバルなど。冬は木の実・干し山菜・ヒモノなどの保存食。今でもこの習慣は残っているので、食べるたびに縄文人を思い出しています。

食料確保の作業の間には土器や石器作りなど様々な仕事をしていました。縄文人の狩は弓矢です。それですばやい動きのイノシシやシカを捕獲することが出来たのです。その他、罾や落とし穴・網なども使用しました。土器の使用は「煮る」ことを可能にしましたが、煮ることで「あく抜き・渋抜き・毒の除去」にも重要な役割を果たしたことは画期的なことです。

約1万年前の縄文早期の人々は、集落周辺のクリやクルミの木やイモ類、彼岸花などを計画的に増やしていく集団もありました。特定の有用な植物を増やすことを「半栽培」といいます。「半栽培」は農耕の原型ですが、日本では広く見られました。

縄文人の信仰と円の思想

生活にゆとりが出てくると、独自の文化を生み出すこととなります。その一つが精霊崇拜、現在の神道の原型です。縄文人は、全ての人間が靈魂を持つと考えていたようです。

「不滅で善良な心を有している。ゆえに、人間の身体は死んでも、目に見えない靈魂はいつまでも生きていて子孫を見守って助けてくれる」と、されました。更に動物や植物、愛用する器物にも靈魂が宿り、彼らが力を合わせて自然界を動かしていると信じていました。

これが精霊崇拜「円の思想」です。自然界をつかさどる精霊にさまざまな祭祀を行ないました。土偶・勾玉・石棒などの祭器が遺跡から多数出土しています。

縄文人の村落と円の発想

精霊崇拜は、全ての人間を平等にするという考えを図にすると「円」になります。集落は円形の広場の周りに住居を集める形態をとりました。住居はほとんど同じ規模です。集落を構成する全ての家族はみな平等という発想です。地面を数十センチ掘り下げ、4～6本の柱を立て、梁を設けてその上にカヤや草を編んだむしろをかぶせて屋根にします。広さは20～30平米ぐらいで、部屋の中央に炉を置き、奥には儀礼空間を置くのが普通です。

縄文都市の生活

縄文文化の基本的要素は縄文早期に出揃っていました。約1万年前から6千年前に至る4000年間が早期です。その4000年間の人々の衣食住や信仰はほぼ同じでした。

縄文都市といわれる青森市三内丸山遺跡は約5千5百～4千年前に至る約1500年間栄えました。縄文前期後半から中期の終わりまでです。約35ヘクタールの広さに、常に500人ほどが住んでいました。太さ1メートル近い柱を6本立てた高床式建物がありました。祭祀用の建造物と想定されています。その他、10メートル以上の長軸をもつ小判型の大型住居跡が20棟以上見付かっています。建物は集落中央を通る道に面して建っていました。集落の周りにはクリ林が造成されていました。

三内丸山遺跡の注目すべき点は、遠隔地の多様な物品が出土したことです。新潟県産の翡翠、岩手県産の琥珀、秋田県つぎき産のアスファルト、北海道産の黒曜石などが見付かっています。翡翠・琥珀は装身具、黒曜石は石鏃、アスファルトは石鏃を矢竹に止めるために使います。これらは海路を使って交易していたのでしょう。繁栄した三内丸山の集落は約4000年前に忽然として消滅しました。気候の冷涼化が原因と考えられています。

自然との共生

食料の確保が計画的になり、大量に確保して貯蔵しながら長期的な食糧事情の安定が図られました。腐敗を防ぐために穴倉などの施設や保存加工が工夫され

ました。

縄文人は多種多様な食料を利用しました。哺乳動物60種以上、貝類350種以上、魚類70種以上、鳥類35種以上、植物性食料55種(実際は300種を超える)以上を食したことが分かっています。それぞれが自然や季節の恵みとして受け取ったのです。

これに対して弥生時代の農耕は「対立」の文化といわれます。農耕は、コメを初めとする栽培種に時間と人手を割き、収量の確保に努めます。春に種籾をまき、水配り・除草など収穫まで息つく暇も無く働き、ひとたび異常気象になれば一挙に飢餓になるのが農耕です。

焼畑に始まる縄文農耕から弥生への流れ

福井県三方町烏浜貝塚(縄文前期)からヒョウタン・リョクトウ・エゴマ・シソ・ゴボウ・アブラナ等の種子が出土しました。狩猟・採集・漁撈にプラス「栽培」があった証拠です。

温暖で雨の多い照葉樹林帯はインド・アッサム、ネパール・雲南に続き、朝鮮半島南部から日本列島南部に続きます。稲はこの地域に生息し、焼畑農耕と共に広がりました。

揚子江流域の江南で生まれた水稻耕作は、紀元前1000年前に朝鮮半島に伝わりました。日本へは、縄文時代晩期(3千～2千3百年)に朝鮮半島から伝えられたといわれてきました。しかし近年、水田跡から縄文土器が出土するケースが多々あり、福岡市板付遺跡や佐賀県唐津市菜畑遺跡からも縄文晩期の土器が出土したことから、九州北部の縄文人が朝鮮半島南部と交易し、水田耕作(水路・井堰・取水口などの構築)を導入したことが判りました。それらの動きはやがて「無紋土器(弥生土器)」と共に日本列島に広まり、弥生時代がはじまります。当初は陸稲でしたが、水田による水稻耕作がはじまると土地の占有が始まり、貧富の格差が生じます。それが特権身分を形成し、「円の発想」から「区分の発想」に立つ社会への転換です。

……やがてあちこちに1000人程度の小国が興り、それらの首長(指導者)が寄り集まり、日本統一の序曲が始まります。弥生時代は邪馬台国の時代です。

- 縄文：精霊崇拜・円の発想・共有財産・平等
- 弥生：祖霊信仰・区分の発想・私有財産・身分制

(以下次号で)